

2. 岩座神神光寺遺跡の調査

安平 勝利

1. 発掘調査の成果

岩座神神光寺遺跡は、平成13年度滞在型市民農園施設の建設に伴い行われた発掘調査によって発見された山岳寺院遺跡である。調査地は比高差約27mをはかる傾斜地で、調査前には旧棚田(畑)を転用した植林地が広がっていた。調査面積は約6,000㎡をはかる。

調査の結果、9ヶ所の平坦地と、その平坦地を構成もしくは区画する26ヶ所の石垣や石列が検出された(図1)。平坦地は、谷地形を活かしながら中央部を盛土し、石垣を積み上げることで造り出されており、ほぼ等高線に沿ったかたちで階段状に配されている。また、石垣が幾重にも重なって検出される場所や二重に積み上げられている部分がみられ、数回にわたる補修や平坦地の敷地拡張のための改修が頻繁に行われていた様子がうかがえる。平坦地上面は後世の圃場開発等のための削平を受けており、建物プラン等の明確な遺構は検出されず数基の土坑の検出にとどまる。これら中世期の遺構群の個々の詳細な時期比定は難しいが、出土した大量の土器は13世紀前半～17世紀のものを含み、14世紀～16世紀後半のものが大半を占めていることは、岩座神神光寺遺跡の活動盛期を示している。17世紀以降の遺物量が減少す



図1 岩座神神光寺遺跡の遺構配置図 (S=1/1000)



図2 岩座神神光寺遺跡の出土遺物

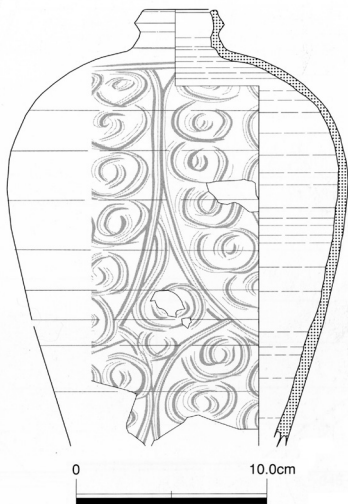


図3 岩座神神光寺遺跡出土の青白磁
渦文梅瓶 (S=1/3)

ることから、中世期の繁栄はこの頃に終焉を迎えたと思われるが、近世期以降の遺構としては、17世紀後半～18世紀前半の梵鐘鑄造遺構が検出されており、近世期まで続く岩座神神光寺遺跡の最も新しい遺構として位置付けられる。

出土した大量の中世土器は、丹波焼や備前焼の壺、甕などの貯蔵用器種、播鉢、土鍋などの調理用器種が主体となっていることから、当地区の平坦地には、寺院の日常生活に密着した機能を有する僧堂や宿坊などの生活施設の存在がうかがえる。しかしながら、最上段の平坦地周辺からは、上記の陶器や土師器類に加え、土師器皿の集積地の検出や瓦質香炉・仏器など祭祀的な要素の遺

構や遺物の出土もみられ、寺院内での僧堂や宿坊の機能の多面性を示しているものともいえる。一方、日常雑器に混じって青白磁渦文梅瓶(図3)や古瀬戸灰釉四耳壺など、いわゆる高級品の出土がみられることは、神光寺遺跡の繁栄をあらわすとともに、地理的に不便な内陸山間部にある寺院においても、中世の盛んな物流・交易ネットワークの中に位置していたことを示している。

検出された石垣や、石垣によって区画された平坦地は、個々の詳細な時期比定は難しいが、各区の石垣間の埋土や裏込めから出土した遺物からみると、概ね14世紀～15世紀代にかけての約200年間に大半の石垣が築かれ、さらに幾度かの改修を受け、平坦地の拡張等が行われたものと思われる。こうした敷地群は、今回の調査区外にも広がっているものと思われ、その最盛期には数多くの坊院が建ち並ぶ壮麗な中世寺院景観が広がっていたと考えられる。

これらの敷地を構成する石垣群は、城郭に本格的に石垣技術が多用される以前の段階にあたり、石垣技術の系譜を考える上で重要であり、戦国期以降の城館に使われた技術系譜が中世寺院の土木技術にもとめられるとされる説を示す一例でもある。また、中世後半期には寺院は公家、武家と並ぶ一大勢力を保有していたことが知られているが、畿内周縁の山間部にあたる地方寺院でも、高度な土木技術とそれを可能にする基礎的労働の組織力を保有していたことが伺え、中世後半期の寺院の性格を示している。

2. 岩座神神光寺遺跡と旧神光寺跡

今回、京都府立大学によって踏査された千ヶ峰中腹に位置する旧神光寺跡と、山裾に広がる岩座神神光寺遺跡は、従来密接な関係をもつ遺跡であると考えられてきた。今回の踏査でもあらためて確認された、参道を中心として階段状に配される平坦地の配置は、岩座神神光寺遺跡の調査でも検出されており、寺院の空間構成に類似点をもつことが確認されている。また、旧神光寺跡の踏査で採取された土器の時期は、11世紀～12世紀を中心に14世紀代までのものが採取されていることに加え、今回、9世紀に遡る遺物が採取されたことは、そのはじまりが大きく遡ることになり注目される。

一方、麓の岩座神神光寺遺跡が13世紀にはじまり、14世紀～16世紀にその活動の盛期がみられることから、中腹の旧神光寺跡と明確な時期差がうかがえ、興味深い在り方を示している。すなわち、平安時代に千ヶ峰中腹の旧神光寺跡にはじまった山岳寺院が、鎌倉時代以降、山裾の岩座神神光寺遺跡にその活動の主体を移し、壮麗な石垣による伽藍配置をもつ山岳寺院へと発展していったとする一つのモデルを描くことができるのではないだろうか。旧神光寺跡の発掘調査が行われておらず、あくまで採取遺物による検討の段階ではあるが、一つの見通しとして提示し、今後の課題としておきたい。

3. 梵鐘鑄造遺構について

岩座神神光寺遺跡では、近世期の遺構として梵鐘鑄造遺構が検出された(図4)。鑄造土坑本体は、径約3.0×2.5mの円形を呈し、深さは約1mをはかり、共判する土器から17世紀後半～18世紀前半の時期に比定された。遺構内部には大量の鑄型や炉壁片の鑄造関係遺物が破棄された状態で埋没していたが、遺構底面において径約72cmの円形の定盤がほぼ完形の状態で検出され、径約72cm、高さ1m未満の比較的小型の梵鐘が鑄造されたと考えられたが、神光寺の梵鐘は戦時下に供出されたため現存しておらず、遺構からの想定にとどまっていた。

今回、岩座神地区のフィールド調査の一環として、地区に残る古文書464点の調査、整理が行われたが、その中に新たな発見があった。安政3年(1856)に作成された「氏神五霊大明神并氏寺両所鈞鐘名并豎幅寸法書上帳」である。詳細は本書9章の記述に譲るが、上記文書には供出される前の氏神五霊神社と氏寺神光寺の梵鐘の刻銘と寸法が記録されている。この記載によると、神光寺の梵鐘は、享保11年(1726)の住職妙彌隆範の代に、江戸の「菊池十蔵藤原武俊」という人物が発起人となって鑄造されたことが銘として刻されており、寸法は豎2尺7寸(約82cm)、幅2尺(約61cm)であったことがわかった。この文書記載の神光寺の梵鐘は、発掘調査で検出した鑄造土坑で鑄造された梵鐘にその法量がきわめて近いこと、時期的にも齟齬がないことから、同一の梵鐘である可能性が極めて高いことが判明した。近世期の事例ではあるが、発掘調査による遺構と文書の記述が合致する貴重な事例の一つとなったことは意義深い。

参考文献

加美町教育委員会 2005『岩座神神光寺遺跡』(加美町文化財報告9)



図4 梵鐘鑄造遺構の定盤

編集後記

歴史学科2年次の学生を対象に「文化遺産学フィールド実習」の授業を設け、長年にわたって基礎的な調査を実践する場として活用してきた。これまで、数多くの市町でお世話になり、夏休みを中心にフィールドワークをおこない、そのそれぞれの取り組みについては、その後の調査などを経て、単発で報告などにとりまとめてきた。今回、兵庫県多可郡多可町で分野横断的な調査をおこなうことができ、また科研のテーマである山寺研究を裨益する研究成果がまとまったため、本書を編むことになった。多大なご援助をいただいたみなさまに改めて謝意を表したい。(ひ)

表紙・裏表紙写真

上左：五霊神社の調査風景（菱田哲郎撮影）

上中：旧神光寺跡の調査風景（菱田哲郎撮影）

上右：岩座神地区文書の調査風景（東昇撮影）

下：岩座神地区の棚田景観（安平勝利撮影）

裏表紙：神光寺仁王門と千ヶ峰（岸泰子撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第29集

播磨神光寺と岩座神地区の文化遺産

編集 菱田 哲郎（京都府立大学文学部教授）
岸 泰子（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
発行日 2024年3月29日
印刷 株式会社 北斗プリント社
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2